



未来を創造する喜び

シンクタンク・ソフィアバンク
代表

藤沢 久美

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」という平家物語の冒頭のくだりを初めて目にしたのは、中学生の時、私は、「諸行無常」という言葉に強く惹かれた。子供ながらに、社会というものはずでに確立していて、なんの取り柄もない私は、その社会に適合して生きていかなくはないかと思っていた。しかし、この言葉に触れた時、社会は常に変化するものであり、自分にも社会で何かができるチャンスがあるような気がして、ワクワクした。

以来、未来を知りたいという思いが、私の原動力となり、未来を予測する仕事である証券アナリストに憧れ、投資信託運用会社に就職した。小さな個人の少額のお金でも、思いを一つにしてファンドに投資をすると、社会が動くことを知り、投資信託は未来を創る道具であり、広く普及したいと起業した。そして出会ったのが、パーソナルコンピューターの父と言われるアラン・ケイの言葉「The best way to predict the future is to invent it.」だった。「諸行無常」の時と同じ感覚が湧き上がり、私たち一人ひとりの行動が未来を創っているのだと意を強くした。

翻って今、政府のムーンショット計画に関わっている。私が担当しているテーマは、「2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現」で、複数の人が複数のアバターとロボットを使って仕事や生活をするための研

究開発プロジェクトだ。議論されている未来社会の姿は、まるでSF映画だが、様々な分野の研究者と共に、その未来社会に必要な科学技術や法制度、倫理面

などを検討し、プロジェクトをデザインしている。実現の保証もない中で、異分野の大人たちが、未来を信じ、真剣にその実現のための方策を議論している。未来を“想像”することは、極めて楽しい。しかし、同時に、未来を“創造”するのは、極めて苦しい。数多くの壁がある。それでもなお、このプロジェクトに時間と労力を割きたくなるのは、やはり未来に関わる喜びがあるからだ。

そして改めて思うのは、経験と体験を積んだ大人こそ、未来を語り、その実現に汗をかくべきだということだ。未来を創造する苦しさがわかる大人こそ、一步一步でも未来が変わることへの喜びは大きい。将来の不安を語るより、大人こそ夢を語り、夢に向かっていく喜びを体現していくことが、実は、人生100年時代に最も必要な社会づくりにつながるような気がしている。

